

東海道中膝栗毛

江戸のコメディアン

弥次さん喜多さん



五十三次の道行に、
無洒落と寸言の二割増、
重荷に僻言夷曲歌
おもにこちつたわれうた
『浮世道中膝栗毛』初編序文より

浮世絵館だより

藤沢市
藤澤浮世絵館
2025 年 7 月
WEB 版



一楽亭栄水の一丸肖像画
十返舎一九 作・画
『浮世道中 膝栗毛』（抜粋）

江戸のベストセラー 『東海道中膝栗毛』

十返舎一九が生み出したキャラクター「弥次さん喜多さん（以下「弥次喜多」）」が登場する滑稽本の数々は、江戸時代絶大な人気を博しました。一九は、自ら挿絵も手掛けた享和 2 年（1802）出版の『浮世道中膝栗毛』をはじめ、『道中膝栗毛 後編 乾坤』（享和 3 年へ 1803）や『東海道中膝栗毛』（文化元年・15 年へ 1804・18）、『続 膝栗毛』（文化 7 年・



十返舎一九 作・画『道中膝栗毛 後編 乾坤』

文政 5 年へ 1810・22）といった続編や前日譚などを長年にわたり執筆し続けました。シリーズの人氣ぶりから、ほかの作家による追随作なども多く出版され、滑稽本の定型として「膝栗毛物」が確立されました。

江戸の戯作者たちを多く紹介している曲亭馬琴の『近世物之本江戸作者部類』（天保 5 年へ 1834）に記載されている一九の紹介文には次のとおり記されています。

「只『膝栗毛』といふ中本のみ、大く時好に称ひて十数篇に及べり。その名聞、三馬に勝れるは、この戯作あるによりて也」

ここで馬琴は、『東海道中膝栗毛』が一九の代名詞と言える作品であったとともに、式亭三馬以上に一九の名が知れ渡ったのは、『東海道中膝栗毛』の大衆小説としての人氣のおかげであると考察しています。

¹ 曲亭馬琴著、徳田武校注、『近世物之本江戸作者部類』岩波書店、2014・51

『東海道中膝栗毛』のシリーズは「滑稽本」の嚆矢（はじめのもの）でもあり、ジャンルの完成形として、その後の日本の文芸史に大きな影響を及ぼしました。「滑稽本」とは江戸時代後期に人気を得た小説の一種であり、笑いを誘う要素が詰め込まれているのが特徴です。文体は、講釈口調の談義本の流れに世相を描く洒落本の要素が加わりながら形づくられていきました。内容は、庶民の暮らしや風俗を大げさに面白おかし

『東海道中膝栗毛』 出版年表

享和 2 年	1802	一九作・画『浮世道中膝栗毛』
3 年	1803	一九作・画『道中膝栗毛 後篇 乾坤』
文化 元年	1804	一九作・画『東海道中膝栗毛 三編 上下』
2 年	1805	一九作・画『東海道中膝栗毛 四編 上下』
3 年	1806	一九作・画『東海道中膝栗毛 五編 上下』
4 年	1807	一九作・画『東海道中膝栗毛 五編 追加』
5 年	1808	一九作・画『東海道中膝栗毛 六編 上下』
6 年	1809	一九作・画『東海道中膝栗毛 七編 上下』
11 年	1814	一九作・画『東海道中膝栗毛 八編 上中下』

く表現することに主眼を置いていきます。

一九は『東海道中膝栗毛』シリーズの初編、『浮世道中膝栗毛』の序文に次のように記しています。

「…五十三次の道行に、無洒落と寸言の二割増、重荷に僻言夷曲歌。」

これは、一九が構想の時から弥次喜多の掛け合いのテンポや、江戸庶民が好むユーモアをふんだんに取り入れることを大事にしていたことを明かす言葉です。この作を土台として、東海道の風俗や、各地の名物名所をとりあげる道中記の要素が含まれました。このように、弥次喜多がくり広げる空騒ぎと旅道中が絡み合うこれまでにない物語が誕生し、ベストセラーとなり、東海道の旅ブームの火付け役として江戸文化に強く根付きました。

江戸のコメディアン
弥次さん喜多さん

『東海道中膝栗毛』の主人公二人、弥次喜多は、騒動、災難満載のドタバタな珍道中を繰り広げながら、冗談軽口と傍若無人な性分にもかかわらず、どこか憎め



十返舎一九作『東海道中膝栗毛 発端』（抜粋）
右：弥次さん
左：喜多さん

ない人柄で江戸庶民の心を掴みました。
二人の旅に出る以前の馴れ初めや生い立ちはメインシリーズ完結後の文化11年（1814）に出版された『東海道中膝栗毛 発端』に収録されています。
「弥次さん（「弥二」とも表記）」こと、枋面屋弥次郎兵衛は、駿河国の府中で生まれました。裕福な商家で育ちましたが、放蕩がたたって借金がかさみ、入れ込んでいた男娼だった鼻之助という若衆と共に江戸へ夜逃げします。この鼻之助がの



歌川国貞（三代豊国）

右：「東海道五十三次之内 江戸 弥次郎兵衛」

左：「東海道五十三次之内 府中 喜多八

ちに改名し、喜多八と名乗ります。

「喜多さん（「北」とも表記）」の愛称で親しまれた喜多八は元をたどると旅役者の弟子でしたが、弥次さんと駆け落ちし、江戸へ移り住みます。そこで、ある大店の奉公人として働くものの、商家の女主人に言い寄ろうとし、嫌がられ、解雇されてしまいます。

一方、弥次さんは江戸の神田八丁堀の長屋住まいで、絵などを描いて生活していました。しかし、喜多さんと組んで行った悪だくみのため、十年連れ添った妻とも離縁し、江戸を離れ、そこから二人で東海道の旅に出ます。

一九による挿絵や他の絵師たちによる描写では、上段の歌川国貞の作品のように、弥二さん



喜多さんの描写

仮名垣魯文 作・落合芳幾 画

右：「東海道中栗毛弥次馬吉原」（抜粋）

左：「東海道中栗毛弥次馬御油」（抜粋）

が中年、喜多さんが青年として描かれることが多いです。これは、一九の設定に沿ったものですが、作品によつては、中段の落合芳幾が描いた2図のように、喜多さんが中年で描かれたり若者として描かれたりと一貫性がなく、幅広い描写が散見されます。

広がる 弥次喜多の世界

十返舎一九は、亡くなる天保2年（1831）まで、弥次喜多の物語を執筆し続けました。『東海道中膝栗毛』の人気は一九没後も続き、その後出版された東海道を題材にした浮世絵などの売れ行きにも強い影響を与えました。天保4年（1833）に出版された歌川広重の代表作、保永堂版「東海道五拾三次之内」はその一例とされています。²

² 松村真佐子「東海道五十三對について」、平木浮世絵美術館「広重・国芳・三代豊国東海道五十三對」平木浮世絵文庫、2011：65



歌川広重「東海道五十三対 二川」

さらに、弘化元年・4年（1844・47）に出版された「東海道五十三対」シリーズもまた、当時の人気絵師、歌川国貞（三代豊国）・歌川広重・歌川国芳の合作であったこともあり、東海道の旅人気とともに大々的に刊行されました。各宿場の歴史故事や逸話に係る絵とともに狂歌が添えられた構図が特徴で、『東海道中膝栗毛』の人気シーンも起用されました。広重が担当した「二川」は『東海道中膝栗毛』の名場面の一つで、弥次喜多が襦袢を幽霊と見間違え大騒ぎする、浜松宿での印象的な場面が描かれています。画面上の団扇型の枠には『東海道中膝栗毛 四編』を楽しそうに読んでいる女性が描かれています。

『東海道中膝栗毛』出版後、多くの追隨作が出版されました。その中でも、幼少の頃から一九の大ファンで、ひとときわ精力的に「膝栗毛物」を出版した仮名垣魯文という戯作者がいました。



落合芳幾「五十三次東海道滑稽双六」（抜粋）

師によるオマージュ作品にも登場し、一九の創造物から独立した江戸時代のアイコンとして確立されます。時代が明治、大正、昭和へと移り変わる中、その根強い影響力は現在にも続いています。

明治初期に執筆した『西洋道中膝栗毛』は、その時代のベストセラーとなり、弥次喜多の孫二人が、ロンドンの万国博覧会を見物するため、東南アジア、インド、エジプトのカイロなどを巡り、ヨーロッパの街並みや文化を紹介しながら、滑稽なワールドツアーを展開します。孫の名前をあえて「弥次喜多」と設定し、「膝栗毛物」の系譜を引き継いだ大衆向けスタイルと、当時、国内で興味が高まっていた外国風俗の描写の組み合わせによりヒット作となりました。



仮名垣魯文 作・落合芳幾 / 三代歌川広重 / 河鍋暁斎 画『西洋道中膝栗毛』